中北海道現代俳句協会

会報

97号

令和５年
４月11日発行

自由こそ文化の守護天使

中北海道現代俳句協会会長
五十嵐　秀　彦

コロナに悩まされた三年間。かつてない経験だった。芥川龍之介が友人たちに「見舞いに来るな。うつるぞ」と手紙を出していたあのスペイン風邪以来の暗黒期でありながら、俳人はやれる限りの努力を続けて来たのではないだろうか。「座の文芸」である俳句が座を奪われる事態に、ただ引きこもるのではなく、行動を取った俳人の実に多かったことを私は誇りに感じている。もちろんコロナを無視したわけではなく、この状況の中で極力安全に留意しながら、ネットを使ったり、人数制限をして対策を立てながらの句会など、さまざまな方策を考え行動し続けた3年間だった。その間に考えたことは、文化というものを支える人々の交流の大切さであった。どのような文化芸術活動も人と人との交流なしには成立しない。そして自由な精神が無ければ創造もできない。

今回はコロナという疾患によって生み出された社会の閉塞であったが、それは政治的圧力によって閉塞させられる社会と紙一重であることも思い知らされた。一月から三月まで道立文学館で開催された「細谷源二と齋藤玄」展では太平洋戦争開始直前に起こった昭和俳句弾圧事件に関する展示もあった。言論が弾圧され俳人たちの筆が強制的に封印させられた時代はついこの前のことだ。いつ再び同じ悲劇が私たちを襲わないとも限らない。自由こそ文化の守護天使であることを、今後も私たちは忘れてはならないだろう。

さて、今年は六月一一日に本会の主管で北海道現代俳句大会が開催される。コロナ前のように懇親会も開催する予定だ。そして東京から注目の新鋭俳人・堀田季何さんをお呼びしている。詩のあるところ俳句であれ短歌であれ自由に創造の翼を広げる堀田氏は、現代俳句協会賞を受賞し、いま乗りに乗っている若手作家だ。多くの会員の皆様が参加し、今次大会を成功させ、その成果を未来に向けた力としたいものである。

中北海道現代俳句協会総会の記

中北海道現代俳句協会事業部
遠藤　静江

R5.2.4
於かでる2・7

早朝よりの快晴の陽ざしのなか、札幌では三年ぶりの雪まつりが始まった二月四日。本年度の新年総会は、総会参加者数二三名を得て開催された。新型コロナ感染拡大が危惧され、新年交流会は行わなかった。

Fよしと事務局長の司会で、まず昨年の物故者への黙祷が捧げられた。続く五十嵐秀彦会長の挨拶は来場を労う言葉から始まり、協会の現況について「組織の公平・公正な運営と活動のためにみなさまのご協力をお願いしたい。またこれからの俳句時代を切り拓く若手作家を育てるべくご協力をお願いしたい」と話された。また道立文学館の※特別展「細谷源二と齋藤玄」にふれ、道内俳壇、現代俳句の先達についての一級資料を実際に見て欲しいとのことであった。

ここで「第二三回現代俳句協会年度作品賞」受賞の松王かをり氏に、Fよしと事務局長より花束贈呈が行われた。また亀松澄江氏の「第二三回中北海道現代俳句賞」受賞も発表され、満場拍手での祝福を受けた。

引き続き出席者二三名・委任状六四名の議決権報告の後、議長に松王かをり氏が指名され議事に入った。令和四年度事業決算について監査委員齋藤雅美氏より、いずれも適正であると報告された。令和五年度の予算案・事業計画案・役員改選等の議案についても出席者全員の拍手をもって承認された。次年度は新年交流会の実施をとの声もある中、議事は終了となった。

今回は大学生の会員の出席があり、とても頼もしくうれしく思った。今年の干支「卯」に相応しい「飛躍・向上」への期待も感じたものである。

最後に会員のみなさまの健康を祈念し、総会は恙なく終了した。

（※ 特別展「細谷源二と齋藤玄」は三月一九日終了）

五十嵐秀彦会長挨拶・大会風景

Ｆよしと事務局長と松王かをりさん

第二三回　現代俳句協会年度作品賞

海原へ

松王かをり

指先にかすかな磁力鳥帰る
キャンピングカーこんもり春の雲のせて
ものの芽に薄きショールのひつかかる
不意打の訃音はリラの香とともに
リラ冷の部屋嵩低く死は置かれ
剪り落とす茎よりあふれ朱夏の水
玻璃片の五月の空を掃き寄する
青蔦や文豪の恋陳列す
蛇の衣きつく捩るるひとところ
白日傘閉づ夕星を巻き込んで
秋の浜海は巻かれて貝の中
天網に引火しさうよ星奔る
流星を容れて淡海（あはうみ）なほしづか
背後より目隠しの指桃匂ふ
桃ひとつ置けば闇夜のやはらかき
ふれ合うて干さるる傘やうろこ雲
街は船傾ぎて秋の灯をこぼす
長き夜を目覚むるたびに雨の中
サフランや星の死はみな爆死なり
火の山の水を引き込み冬菜畑
麺棒も午後の冬日もころがして
連弾の交差する腕クリスマス
盗み見をポインセチアが邪魔をする
風の輪唱いつよりか夜の雪
木々の隙びつしりと立つ寒の闇
夜汽車とならむ雪原をゆく頃に
春寒の手に温めて化粧水
古雛いくつのいくさ見て来しか
水温む船の汽笛はドのシャープ
雪解川体（たい）をほどきて海原へ

令和５年度中北海道現代俳句協会　事業計画（案）

日　程	事　業　計　画	
1月28日(土)了	第23回中北海道現代俳句賞　選考委員会 かでる2・7にて開催　応募総数20編 ＜受賞作「ざわめく」・亀松澄江氏に決定＞	組織活動部 顕彰係
2月4日(土)了	令和5年度定期総会　かでる2・7にて 開催（コロナ対策の為新年交流会は中止）	事務局
6月11日(日)	第32回北海道現代俳句大会（中現俳主管）・懇親会 13時から札幌サンプラザホテル　北区北24条西5丁目1 講　演　：　堀田季何氏（俳人・現代俳句協会会員） 演　題　：「未　　定」	事業部
8月26日(土) 実施予定	俳句研究交流句会　開催時刻その他詳細調整中 かでる2・7　820室　札幌市中央区北2西7	組織活動部
8月より	第24回中北海道現代俳句賞　募集開始 締　切：12月15日（金）　当日消印有効	組織活動部 顕彰係
その他	会報　第97号：4月 第98号：8月 第99号：12月発行 「一人一句集」4月発刊（今号同封） 幹事会　年6回実施予定（奇数月） 三役・顧問・中北海道現代俳句賞選者の会　年１回実施予定	広報部 事務局

現在の役員・幹事構成

役　員

会　　長　五十嵐秀彦
副 会 長　石本　雪鬼　亀松　澄江（事業部兼任）
事務局長　F　よしと
監　　査　平尾　知子　齋藤　雅美
顧　　問　辻脇　系一
参　　与　横山いさを

幹　事

会　　計　高畠　葉子
総 務 部　阿部　満子
事 業 部　中田　琢志（総務部兼任）　林　　冬美
　　遠藤　静江　金子真理子　遠藤由紀子（新）
組織活動部　原田　昌克　鹿岡真知子　近藤由香子　中田真知子（新）
　　瀬戸優理子　菅井美奈子（顕彰係・総務部兼任）
広 報 部　青山　酔鳴　廣田　和久（新）

中北海道現代俳句賞選者

五十嵐　秀　彦
石　川　美智子
瀬　戸　優理子
永　野　照　子
松　王　かをり
渡　辺　のり子

中北海道現代俳句協会会費納入の御願い

中北海道現代俳句協会の会費納入は振込となっております。手数料のご負担もお願い申し上げます。

第23回中北海道現代俳句賞受賞作品

受賞者　亀松　澄江氏　プロフィール

1953年　北見市生まれ、札幌市在住

1996年　「艀」入会　　2010年　同退会

2010年　「草木舎」入会　　2017年　同代表

中北海道現代俳句協会副会長
北海道俳句協会地区委員　北海道俳句協会賞選考委員

ざわめく

雨の日の雨を遊ばせ水馬

戦すぐそこ蚊を打つ掌が痛い

白桃の産毛優しく尖りたる

お隣の二百十日の猫の爪

鬱の字を解いてみたり十三夜

虫の夜枕が海になっている

これやこの団栗日和一万歩

実玫瑰眠らぬ海を灯しおり

かわたれの龍の棲める木秋深む

「文語文法」秋霖へ布栞

亀松　澄江

錦秋を跳ねる斑紋然別

原野末枯幾万の星抱く

ピノキオの鼻の正直開戦日

走り根の惑いの絡む去年今年

盆の窪地球の鼓動凍てており

寒波来る午前三時の舳先かな

革鞄零下三十度の汽笛

冬の日を使い切ったり川の幅

調律師白鳥の喉緩めやる

阿修羅三面寒の水ざわめける

令和４年度　第２３回　中北海道現代俳句賞一次選考結果

番号	作品名	（作者名）	五十嵐秀彦	石川美智子	瀬戸優理子	永野照子	松王かをり	渡辺のり子	点数
2	古き波形	（Ｆよしと）		○					1
3	ざわめく	（亀松澄江）	○	○	○	○	○	○	6
4	小樽	（安田中彦）	○					○	2
5	聖五月	（岡本順子）					○		1
7	遁走曲	（坂本眞紅）			○				1
11	冬青空	（古川　和）		○			○	○	3
12	銀河の滑走路	（髙橋あや子）			○				1
14	ジョーカー	（遠藤由紀子）				○			1
20	らとぅとぅと垂らす	（青山酔鳴）	○			○			2

選考経過

選考委員長　**瀬戸優理子**

一月二八日、かでる2・7にて選考委員六名全員の出席のもと選考会が実施された。感染症拡大や大雪の影響を受けることなく、三年ぶりに全員揃っての対面選考会が開けたことは大変喜ばしいことであった。

応募作品は二十編。新作未発表二十句と規定変更して二年目の今年も活況であった。うち初めての応募が五名、五回以上の応募が九名、会員外の応募も五名と、この賞がさまざまな方々からの期待と熱意に支えられていることを実感した。

まず書面による事前の一次選考結果（別表参照）に基づき、各選考委員が意見を述べた。順位をつけず投票した三篇の推薦作品にとどまらず、次点として注目した作品も含めて俎上にのせ、丁寧に議論していった。

多数の作品について意見交換がなされた後、その中から複数の委員が推せるとした「ざわめく」「小樽」「冬青空」「らとぅとぅと垂らす」の四編で決選投票を行う運びとなった。

一位三点、二位二点、三位一点で投票して集計。結果は、「ざわめく」十七点、「小樽」六点、「冬青空」七点、「らとぅとぅと垂らす」六点となった。一次選考で委員全員が票を入れ、決戦投票でも頭一つ抜け出た「ざわめく」を受賞作とすることについて委員全員異論なしで、投票通りに決定した。

「ざわめく」の作者は亀松澄江さん。本賞への応募は十七回目で、長年にわたる挑戦を実らせて栄冠を掴んだ。

満を持しての栄冠を祝う

五十嵐秀彦

いつものように各選考委員が優劣つけずに三篇を選ぶ一次選考の結果、「ざわめく」を全員が選んでいるという一見歴然としている状況から選考会は始まった。これは議論の余地なく決定するかと思ったが、しかしそうはならなかった。三篇の中で「ざわめく」が必ずしも一番ではないという委員が複数いたのである。それほど今回の応募作は基準を越えた作品が多かった。

議論を重ねた結果、最終的に残ったのは「ざわめく」「小樽」「冬青空」「らとうとうと垂らす」の四篇。

どれもレベルが高く共鳴句の多い作品だった。私としては一次選考の段階から⑳「らとうとうと垂らす」が強く印象に残る作品で、推薦できると感じていた。平均点的なものを求めずに果敢に個性を表現する姿勢に惹かれたのである。難解なところもあるかもしれないが、日常や実感に根ざしたところから作られており説得力があった。

かひがらぼね醒める羅羽織るとき

踝は孤島ブーツがまだ堅い

他にも共鳴句が多い。かなづかいに一箇所間違いがあったのは惜しまれた。

③「ざわめく」は抒情と詩的冒険のバランスが取れていて、二〇句としての完成度が応募作中トップに思えた。数字を含んだ句が多すぎるのではという指摘もあったが、私は気にならなかった。

お隣の二百十日の猫の爪

原野末枯幾万の星抱く

④「小樽」は、ひとつの町をテーマとした連作二〇句という俳句賞的には難しいアプローチだったものの、観光俳句になることなくまとめたのは力量の高さだろう。

永遠の夏の休暇のやうに海

⑪「冬青空」では次の句に惹かれた。

青虫は蛹に後日談は聞けず

この4篇で最終投票をしたところ、「ざわめく」が圧倒的に票を集めて受賞と決まった。結論は一次選考と変わらぬ結果となったが、最終に残った4篇だけでなく全作品への忌憚のない議論がなされ、充実した選考会だった。最後に「ざわめく」の作者が亀松澄江さんであるこ

とが分かり、なるほどと納得した。いつもいま一歩のところで受賞を逃してきた作者の、満を持しての栄冠である。

選考を終えて

石川美智子

令和四年度、第二三回中北海道現代俳句賞は亀松澄江氏の「ざわめく」に決定した。未発表二〇句に纏める力量をも問われる中での受賞。本当におめでとうございます。

一次選考では次の三篇を選んだ。

②「古き波形」　F　よしと

すれ違う風に芯あり暮の春

綿虫や昨夜密かな論に湧く

漢方の太き効能そぞろ寒

平明かつ伸びやかな詠い方の中に感情の揺らぎがあり印象的である。「風に芯あり」「昨夜密かな」「太き効能」など中七の言葉の選択に無理がない。内なる詩魂に動かされて益々俳句の深淵に近づくだろう。

③「ざわめく」　亀松　澄江

雨の日の雨を遊ばせ水馬

戦すぐそこ蚊を打つ掌が痛い

これやこの団栗日和一万歩

美しい情景描写と反戦の思いなど、多彩な面を見せてくれる作者である。「雨の日の雨を遊ばせ」の韻の踏み方や調べのよさ。すっと読み手を導いていく。俳句の高みを計りながら作句しているのか。羨ましい。

⑪「冬青空」　古川　和

いま泣けば号泣となる冬青空

生ハムの薄き層剥ぐ霜の朝

三面鏡一面いつも青葉闇

詠い方は静かであるが芯の強さと美的感覚の冴えを感じる。

特に一句目が作者の持ち味。「いま泣けば」の上五は下五「冬青空」と呼応し軽やかでさえある。泣いていない。

次点で選んだのは次の作品である。

⑤「聖五月」　岡本　順子

珈琲とゆっくり育つ春愁い

水の秋しずかに老いを招き入れ

丁寧に生き切っている姿勢に心打たれた。共感しきりである。頷きながら読ませていただいた。

その他、安田中彦さんの「小樽」、遠藤由紀子さんの「ジョーカー」に佳句が多かった。また、多田琴美さんの「い

つかは冬の虹」、石井美髯さんの「アマン系」などに魅かれる句があった。

冒険をおそれずわたし流で二十句に挑戦していこうという気概は、これからの俳句に昇華され、楽しませてくれるに違いない。来年も楽しみである。

読み応えと新しさ

瀬戸優理子

一次選考として私が選んだのは③「ざわめく」⑦「遁走曲」⑫「銀河の滑走路」の三篇。それ以外にも「古き波形」「小樽」「聖五月」「鎮魂漂白」を注目作と考えて選考会に臨んだ。

③「ざわめく」　亀松　澄江

戦すぐそこ蚊を打つ掌が痛い

白桃の産毛優しく尖りたる

調律師白鳥の喉緩めやる

阿修羅三面寒の水ざわめける

社会詠的な視点から批評を諧謔に包んで差し出す句、自身の美意識を言葉で再構築し虚実のあわいの映像として見せる句など、言葉の一歩奥の世界を感じさせる読み応えのある句が並ぶ作品だった。

「『文語文法』秋霖へ布栞」の鍵括弧の効果の有無、「虫の夜枕が海になっている」の三鬼句へのオマージュの是非について等、議論を呼ぶ句もあったが、全体として作者が提示したい世界観と表現技法のバランスがもっとも良く取れていて総合点の高い作品だったと思う。ご受賞おめでとうございます。

⑦「遁走曲」　坂本　眞紅

すててこの羽衣めきて二ミリ浮く

十薬の星に残した住民票

月煌煌オカピの縞の未完の完

放さずに離れゆくもの子と風船

音韻を意識したリズミカルな言葉並び、従来の俳句ではあまり見られない新しい素材の取り込み等、随所に冒険や工夫が見られた。俳句表現の上でも鮮度ある展開を持つ句が出てくると、さらに読者を引き込んでいく句群になりそうだ。

⑫「銀河の滑走路」　高橋あや子

ストラディバリウス銀河の滑走路

白鳥を数ふるやうな夫の眉

少年の匂ひ樹氷より生るる

セーター着込む漢何にでも醤油

今回、もっとも共鳴句が多かった作品。大胆な二物衝撃、詩的飛躍の距離の大きさ、展開の意外性、詩性溢れる

比喩など、独自の感性が随所に感じられた。良い意味で俳句ズレしていない疾走感ある現代的なリズムと詠みぶりを楽しませていただいた。

選を終えて

永野　照子

二〇編の応募作から六編を選び、さらに三編を一次選に選んだ。

③「ざわめく」　亀松　澄江

戦すぐそこ蚊を打つ掌が痛い
虫の夜枕が海になっている
冬の日を使い切ったり川の幅

戦へのやりきれぬ思いと体感の交差する一句目。二句目は三鬼の句が想起されるが虫の夜に味わいがあった。冬の日を大切に使い切る川幅に冬川の本質をみるようでどこか懐の深さを思わせる。一連の句の根底に通い合うものがあった。

⑳「らとうとうと垂らす」青山　酔鳴

落とし角記憶には抜殻がある
湯冷めしてリゲル・シリウス・プロキオン
踝は孤島ブーツがまだ堅い

イメージの具象的、即物的な表現に独自性があり、佳句も多かった。二句目は季語の選択が最適かと思う。

⑭「ジョーカー」　遠藤由紀子

手鏡の雲の迅さや太宰の忌
剥製の硝子の眼冬に入る
走り根に傾ぐ祠や白鳥来

映像化と伝達力を備えた誠実味のある手堅い作品が揃っていた。

最終選考は③の一編を通しての調和を選ぶか、⑳の一句一句の独立をよしとするかの難しさはあったが、③を推した。⑳には表記のミスや推敲不足の句もあって残念であった。

受賞の亀松澄江さんは十七回目の挑戦であり、その努力を心から讃えたい。おめでとうございます。

他の三編は

⑦「遁走曲」　坂本　眞紅

すててこの羽衣めきて二ミリ浮く
夕焼の燃えさし明日の種火とす

虚の面白さが特長と思うが二番のように情感あふれる句も心に残る。

⑧「ピエタ」　平　倫子

初雪に「ピエタ」の香気ありにけり
まだ少し森の十月もうすこし

一句目の印象は柔らかく豊かなものを包み込んでいて魅力があった。

⑪「冬青空」　古川　和

玻璃越しの空を引きよせ雛納
ステテコをはみ出す父のいくさ傷

平明な表現でわかりやすく手応えのある句が多かった。

選考所感

松王かをり

前回より応募内容の変更があり、なかなか未発表二十句を揃えることは難しいのであるが、今回も二十編の応募作品が集まった。まずそのことに御礼を申し上げたい。

今年の作品は平均点が高く、一次選考で三編を選ぶのに苦労したが、私は、受賞作となった「ざわめく」、そして「聖五月」「冬青空」の三編を、一次選考で選んだ。

③「ざわめく」　亀松　澄江

白桃の産毛優しく尖りたる
冬の日を使い切ったり川の幅
調律師白鳥の喉緩めやる

一句目は、「優しく」と「尖りたる」という相反する言葉を使って、白桃の産毛のさまをみごとに描き出している。二句目、「冬の日を使い切った」のは「川」なのか「作中主体」なのか。おそらく両方なのだろう。ひねもす冬の日を流し続けてきた川、そして充実の一日を終えようとしている作中主体、両方の一日を、「川の幅」がしっかりと受け止めている。三句目は、喉が詰まっているような白鳥の悪声を句材としながら、それをファンタジーの匂いのする一句に仕立て上げた手柄。飽きさせない二十句だった。ご受賞、本当におめでとうございます。

⑤「聖五月」　岡本　順子

リラ冷えの一日暮れたり粥に塩
セロリまずコップに差して地平線

静かな日々の生活の中に、詩の種を見つけようとしている姿勢が二十句から伺われ、心惹かれた。「粥に塩」を入れるという行為が、「リラ冷え」との取り合わせで、なんとも詩的に。そして二句目、「コップに差したセロリ」の縦の構図に対して、横に広がる「地平線」を配して詩に昇華させた。

⑪「冬青空」　古川　和

生ハムの薄き層剥ぐ霜の朝
ステテコをはみ出す父のいくさ傷

右のような句に注目した。一句目のひりひりするような感覚の句から、二

句目の戦争を取り上げた句まで、幅広い二十句だった。時事を詠む難しさを考えさせられた作品でもあった。

右の三編以外では、〈踝は孤島ブーツがまだ堅い〉という鋭い感性の感じられる句を含めた⑳「らとぅとぅと垂らす」にも注目した。

言葉が響き合う美しさ

渡辺のり子

今回の応募作品には秀作が多かったと思う。心象を託す物の取り合わせが見事で、日本語の語彙が響き合う美しさに浸らせてもらった。特に受賞作品「ざわめく」は、二十句全体に措辞の巧みさが感じられ、独立した一句ずつが読者の琴線に触れてくる強さを持っていた。同時に響き合う言葉が美しさを醸し出し、快い時間を与えてくれた。ご受賞本当におめでとうございます。

③「ざわめく」　亀松　澄江

白桃の産毛優しく尖りたる

「優しく尖り」が「白桃の産毛」と美しく響き合って、快い時間を与えてくれる。

革鞄零下三十度の汽笛

「革鞄」と「汽笛」の響き合いから美しい北国の寒さが伝わって来る。

走り根の惑いの絡む去年今年

冬の日を使い切ったり川の幅

一時選考では「ざわめく」の他に、次の二編を推した。

④「小樽」　安田　中彦

廃屋が昏き口開く寒茜

「昏き口開く」と「寒茜」の取り合わせから、「廃屋」に嘗て住んでいた人間達が浮かび上がり、物語が紡がれる。

雪婆払ひし腕のかろきこと

鰊群来金箔の間を開け放ち

⑪「冬青空」　古川　和

いま泣けば号泣となる冬青空

「冬青空」の措辞で、泣くのを我慢している作者の姿が見えてくる。

生ハムの薄き層剥ぐ霜の朝

ステテコをはみ出す父のいくさ傷

その他、惹かれた作品を掲げる。

⑤「聖五月」　岡本　順子

珈琲とゆっくり育つ春愁い

おしまいは空へ大きく水を打つ

⑭「ジョーカー」　遠藤由紀子

啓蟄や猫のころがす砂時計

覗き込む蛍袋にしんと闇

⑲「アマン系」　石井　美髯

合言葉は海月だったか自由だったか

白桃腐みだしたし僕帰るね

②「古き波形」　F　よしと

月光の生き生きとして蔵の酒

中北海道現代俳句賞応募について
組織活動部顕彰係からのお願い

◎応募用紙と作品用紙の記入漏れやチェック欄の☑漏れにご注意ください。

◎作品を郵送の際には入れ忘れのないように、応募用紙と作品、応募料を再度ご確認ください。

「細谷源二と齋藤玄・北方詩としての俳句」
北海道立文学館特別展を振り返って

中北海道現代俳句協会
副会長　石本　雪鬼

この１月から３月まで、この特別展が北海道文学館で３回の連続講演会と共に大盛況で終わった。太平洋戦争中の俳句弾圧の荒波に耐え、「働く者の俳句」をめざし花鳥諷詠を超越した現代俳句に挑戦した源二と、幽玄の世界から伝統詩型中に新局面を開いた玄、作風は対照的ながら新興俳句の精神を北海道に根付かせ、「北方詩としての俳句」を育んだ共通点がある二人を学べた貴重な機会だった。３回の講演は今でも、文学館ロビーで視聴可能であり、聴講できなかった方の視聴をお勧めする。また、展示された資料の中には、弾圧にさらされた「京大俳句」の原本などもあり、これらも可能な限り保存公開してほしい。３回目講演会講師のマブソン青眼さんは、「俳句弾圧不忘の碑」を建立したチャレンジ精神あふれる講演で、参加者を魅了した。この展示を企画し、展示中何度も展示ツアーガイドを務められた、五十嵐秀彦中現俳会長に感謝したい。

◇句会のご案内◇

中現俳事務局主催
「青のフロント句会」
偶数月第２土曜日13～16時
かでる２・７ 当季雑詠3句
問合先・五十嵐秀彦
TEL 011-852-7014

中現俳会員主催
「中北海道ゼロ句会」
不定期開催
問合先・村上　海斗
ngh_zero_kukai
@outlook. Jp

「たんね句会」
毎月１回　所要１時間半
月曜日10時より
手稲区民センター
問合先・安田　中彦
TEL 090-2819-0088
soyo07soyo01
@ybb.ne.jp

帯俳句会
毎月第４日曜日13～16時
かでる２・７
当季雑詠＋席題の2～3句
問合先・石川美智子
TEL 0133-74-7401

北大俳句会「えぞりす」
基本的に大学生・高校生
を中心とする句会です。
不定期開催
問合先・千貫幹生
大橋弘典
Hokudaihaiku@gmail.com
ツイッター @hokudaihaiku

礎

鈴木光彦

略歴　大正一二年檜山管内生。昭和一八年京都府内中学校（現鳥羽高校）卒業、翌年従軍。終戦後細谷源二等刊行の「北方俳句人」「氷原帯」に参加。六二年氷原帯第三代主宰。中北海道現代俳句協会会長・現代俳句協会幹事・読売新聞俳壇道内版選者・北海道文学館参与等歴任。北海道新聞俳句賞・札幌芸術賞・鮫島賞等受賞。句集「雪齢」「黄冠」「花筏」。平成三〇年一一月永眠。

動くべき日の雪解山雪解川
水叱り水の先ゆく花筏
どっと出てあそぶ雪虫あそばぬ木
生国を洗いきったる蛇の殻
昆虫記読む膨大な雪明り

信藤詔子　抄出

〔青のフロント〕佳句抜粋

ファックスの着信ランプ久女の忌　中村みずほ
むかし男ありけり羆射止めけり　田口くらら
侘助や豆大福をひとくちで　木下　小町
春の月漂ふ四畳半いびつ　本村なつみ
花時計せっかちの赤から枯れて　酒井おかわり

幹　事　会　報　告

令和5年1月19日㈭ かでる2・7/610号室

議題

1　令和５年度定期総会（事務局）
2　第23中北海道現代俳句賞（組織活動部）
3　「一人一句集」2023年版（事務局・広報部）
4　会報97号　（広報部）
5　第32回 北海道現代俳句大会（事業部）
6　令和５年度俳句交流研究句会（組織活動部）
7　その他（会長）
　道立文学館特別展「細谷源二と齋藤玄」について

出席者15名
　五十嵐・石本・亀松・Ｆよしと・青山・阿部・遠藤Ｓ・遠藤Ｙ・金子・近藤・瀬戸・菅井・中田Ｍ・中田Ｔ・林

令和5年3月16日㈭ かでる2・7/610号室

議題

1　第32回北海道現代俳句大会（事業部）
2　令和５年度俳句研究交流句会（組織活動部）
3　第23回中北海道現代俳句賞（組織活動部顕彰担当）
4　「一人一句集」2023年版（広報部）
5　会報97号（広報部）
6　その他　（会長・事務局）
　現代俳句協会総会、出席の件（会長）
　今年度以降の会員住所録発行の件（事務局）
7　新会員推薦／募集／会員動向（事務局）

出席者14名
　五十嵐・石本・亀松・Ｆよしと・青山・阿部・遠藤Ｓ・遠藤Ｙ・金子・近藤・鹿岡・菅井・中田Ｍ・中田Ｔ

◇◇◇ 北海道各地区現代俳句大会のご案内 ◇◇◇

第33回北北海道現代俳句大会

◇日時　令和５年６月25日（日）13時より
◇場所　ときわ市民ホール
　旭川市５条通４丁目893-1
　TEL　0166-23-5577
◇会費　1,000円
◇講演　未定　◇懇親会はございません
◇出句　出句２句一組1,000円（所定用紙）
◇締切　４月30日（日）必着
◇郵送　〒078-8320
　旭川市神楽岡10条１丁目2-2
　加藤ひろみ方　TEL　0166-65-0820

第29回東北海道現代俳句大会

◇日時　令和５年７月９日（日）13時半より
◇場所　とかちプラザ　３階
　帯広市西４条南13丁目1
　TEL　0155-22-7890
◇トーク・セッション「鈴木八駛郎と俳句」
　鈴木八駛郎名誉会長・石川青狼会長
◇終了後懇親会に替え当日参加の茶話会あり
◇出句　２句一組1,000円（所定用紙）
◇締切　５月26日（金）必着
◇問合　〒088-0612
　釧路郡釧路町雁来1-34
　西村奈津方　TEL　0154-55-4588

第32回 北海道現代俳句大会のご案内（中北海道現代俳句協会主管）

１ 日　時　令和５年６月11日（日）午後１時より
２ 場　所　札幌サンプラザホテル（北24条西５丁目１）TEL 011-758-3111
３ 会　費　大会費：1,000円　当日受付にて申し受けます
４ 講　演　堀田季何氏　俳誌「樂園」主宰・現俳協IT部長・第77回現代俳句協会賞
３ 演　題　「未　　定」※会員以外どなたでも聴講可。下記までお問い合わせ下さい
５ 問合先　事業部　金子真理子　TEL 011-644-5193

※ 出句および懇親会の中込みは受付終了しました
※ 懇親会出席の取消しは当日３日前までとし、以降は会費6,000円を頂戴します
※ コロナ感染状況により変更になる場合があります

○ 当日は第24回中北海道現代俳句賞の顕彰も併せて行います

◆事務局だより

四月になりました。最近はコロナウイルス感染予防対策が緩和され、市民も観光客も活動範囲がずいぶん広がってきたようです。また今年は雪解けが早く、危険な路面状態からも早々に解放されました。みなさまも句会などへの参加機会が増えていると思いますが、引き続きご体調に留意してお楽しみください。

今号に詳しく報告されている通り、本年も二月四日に総会を開催し、みなさまに事業報告・決算報告及び本年度の計画にご賛同をいただきました。心より感謝します。

北海道立文学館の特別展「細谷源二と齋藤玄・北方詩としての俳句」が先月一九日をもって終了しました。北海道の現代俳句や当協会の基礎を育み、発展させた方々の偉業をつぶさに見ることが出来、たいへん感銘を受けました。

六月には第三二回北海道現代俳句大会を中北海道現代俳句協会主管にて開催します。講師は堀田季何氏です。興味深い講演を聴けることと思います。是非ともみなさまのご参加をお願いいたします。

（Fよしと）

編集後記

道央は思ったほどの大雪には見舞われずに冬が終わりました。昨年を思うと拍子抜けの感です。桜は月末には咲くでしょうか。今年は六月の北海道現代俳句大会の主管を中北海道が担当します。堀田季何さんの講演会は会員以外でも聴講できますので、俳友の方とお誘いあわせの上ぜひお越しください。今回は各地区協会の大会のご案内を掲載しております。大会出句・二句一組千円にお付き合いいただけましたら幸いです。三月からマスクの着用が基本的に自己判断となりましたが、健康状態はひとそれぞれ。どうかご自愛ご専一にお過ごしください　（青山酔鳴）

会　員　動　向

〈入　　会〉あおのめ
〈地区内移転〉桂井俊子
〈俳号変更〉
（旧）大江那果 → （新）故永しほる
会員数 110名（令和5年3月1日現在）

発行人　五十嵐　秀彦
発行所　中北海道現代俳句協会
〒064-0952　TEL 011-641-1007
札幌市中央区宮の森2条8丁目1-18
Fよしと方
編集人　青 山　酔 鳴
〒061-1354　TEL 090-3398-3457
恵庭市島松旭町4丁目9-1